

グッドプラクティスから臨床倫理をとらえなおす  
－看護管理者、そして実践家の視点から－

社会医療法人近森会  
理事・統括看護部長／老人看護専門看護師  
岡本 充子

近年、医療現場における臨床倫理の重要性はますます高まっている。特に高齢化の進行と医療の高度化により、患者の意思決定支援や尊厳あるケアの実現といった倫理的課題に、医療従事者が日常的に直面する機会が増えている。臨床倫理は、特定の専門職や倫理委員会だけが取り組むことではなく、すべての医療職が日々の実践の中で主体的に考え、判断していくべきテーマである。看護部のトップマネージャーであり老人看護専門看護師として、高齢者ケアの現場で多くの倫理的課題と向き合ってきた活動を紹介する。

高齢者は、老化や認知症の進行によって意思疎通が困難になることがあり、また、疾患や加齢による機能低下によって他者の手を借りなければ生活が困難になる。さらに、多様な価値観や生活背景をもつ高齢者を理解し支援することの難しさから、現場ではさまざまな倫理的問題が発生しやすい。このような状況の中で、現場の看護師たちは常に迷いや葛藤を抱えながらケアを提供している。一つとして同じケースはなく、明確な正解も存在しない。そのため、看護師が感じる「もやもや」や違和感に寄り添い、対話を重ねながら最善を模索していく支援が不可欠であると考えます。

そこで、倫理的問題が発生した際には、「誰の視点で考えるのか」「どこに価値の対立があるのか」といった本質的な問いを重視し、医師や他職種と協働しながら、チームでの検討を丁寧に積み重ねてきた。また、日常的なケアの質こそが倫理実践の基盤であるという認識のもと、「このケアは本当に高齢者の尊厳を尊重したものか」とスタッフとともに問い続ける姿勢を大切にしている。加えて、スタッフ一人ひとりが倫理的感受性を高められるよう、教育の機会を設け、「なんかもやもやする」といった気づきを見過ごさないことの大切さを伝えてきた。そして、専門看護師が中心となる倫理コンサルテーションチームを組織し、現場の声に耳を傾けながら、タイムリーな事例検討や倫理カンファレンスを開催し、共に考える場を提供している。このチームの存在により、スタッフが倫理的課題を抱えた際に気軽に相談できる体制が整いつつある。

臨床倫理とは、特別な場面に限定されるものではなく、日々のケアの中に自然と生まれる問いそのものである。その問いに誠実に向き合い続ける姿勢、多職種で対話を重ねる文化こそが、現場におけるグッドプラクティスを育む基盤となると考えている。